

長岡外史文書研究会編

『長岡外史関係文書』

回顧録篇  
書簡・書類篇

小池 聖 一

長岡外史は、明治陸軍の重大事件である月曜会事件の主役の一人であり、日露戦争時には、陸軍参謀次長として旅順攻略戦や樺太占領に大きな役割を果たした。また、日

露戦争後、新潟県高田（現上越市）の第一三師団長時代には、スキーの普及に尽力し、予備役後は、民間航空界の育成に貢献した人物としても知られている。今回、出版された史料集は、この長岡外史が折りに触れて書いた回顧録と、書簡・書類をまとめたものである。このなかで、回顧録編では、前半生にあたる軍人時代と昭和期の航空事業についての部分が、はじめて刊行されたものであり、書簡・書類編についても、谷寿夫著『機密日露戦史』（原書房）等で引用されてはいるものの、日露戦争以後の部分が完全に活字化されたのは始めてである。

『回顧録編』の構成は、「第一巻 日露戦争まで」「第二巻 日露戦争の回顧」の前半部分で長岡の現役軍人時代の代表的な出来事が回想され、後半部分にあたる「我邦最初のスキー」では、日露戦争後の第一三師団長時代に民間を含めた形でスキー導入（日本で最初ではないが）・普及に努めた様子が、また、「飛行界の回顧」以下では、長岡が予備役後に民間航空界の発展に寄与したことが述べられている。そして、巻末の解説では、国立国会図書館憲政資料室所蔵の寺内正毅文書・桂太郎文書・岡市之助文書

等の書簡を使用して日露戦争以降を中心とした長岡の動向が紹介されている。本書の魅力は、明治期の陸軍部内を知る上で数少ない資料であることであろう。残念ながら本書には、日清戦争開戦直後の回顧録（新日本の鹿島立）が収められていないが、月曜会事件前後の陸軍と日露戦争についての記述は、洒脱な語り口のなかにも、当事者ならではの内容と迫力を持っている。

まず、「月曜会」事件前後の記述について触れてみたい。

「月曜会事件」とは、明治一八・一九年から二三年頃までの陸軍の変革期において、山県有朋・大山巖らを中心とする陸軍主流派と四將軍（三浦梧楼・鳥尾小弥太・谷干城・曾我祐準）との対立の中で、陸軍部内にあった地域横断的な中堅・若手将校の兵学研究団体「月曜会」が、軍上層部の圧迫により、二二年二月に、解散に迫込まれた事件をさす。この事件および月曜会自体の評価については、大江志乃夫氏が月曜会を純然たる兵学研究団体と指摘（『日露戦争の軍史的研究』昭和五一年、岩波書店）し、四將軍に利用された政治的団体とする（「公爵桂太郎伝（乾）」（大正六年、故桂公爵記

念事業会刊）の記述に対して批判をし、また、村瀬信一氏の研究（いわゆる「月曜会事件」の実相について）『日本歴史』二八四号）等を通じてその実体の解明が進んだ。その後、本書所収の回顧録を使用した寺町明子氏の論文（『月曜会事件に関する一考察』『史窓』四四号）により、月曜会自体の組織、活動、人事等が明らかにされるなかで、月曜会が陸軍に対して自立的存在とされ、大沢博明氏の論文（『月曜会事件の再検討』（一）（二）―所謂四將軍との関係を中心

に―）『法学雑誌』三五卷一、二号）によつて、月曜会事件における四將軍派と月曜会とは、実力本位・藩閥情実打破の点での共鳴関係にあり、「専門化」軍形成過程において、軍隊秩序と選抜システムを独占し、体制安定とその主導力を確保するために陸軍主流派が月曜会を解散させたことが立証された。この大沢論文により、月曜会事件を

めぐる論争に一応の終止符が打たれたが、それでもなお、史料の少ない明治期の陸軍における数少ない情報源として、本書の価値は際立った存在である。つまり、長岡が「幸福多き山口県に生まれたために所謂軍閥の一人者」でありながら、「低能者、無能

者が妄りに要職を占領して、只人望を収むることのみ汲々として、一切軍事の発達を謀らざるのが残念」であるとして、月曜会創設の中心人物となり（二六―二七頁）、藩閥情実打破を主張したこと等、当時の陸軍部内において、戦功ある上官（薩派系軍人）と、長岡らの陸大出のエリートの中核とする新進の将校との対立が深刻な問題であり、月曜会の創設（『月曜会趣意書三――四〇頁）とあわせて興味深い情報を提供しているのである。これは、明治期の陸軍のエリート選抜システム全般に対しても、その後の長岡の登用の在り方（長岡がフランスの寺内により抜擢されたこと等）を通じて、そもそも「陸軍主流派とは何か」という間に答える上でも、明治陸軍を解明する手がかりとなる貴重な資料であると言うことができるであろう。

そして、本書の最大の眼目とされるのが、日露戦争時の長岡の回想部分（第二巻）である。この部分については、書簡・書類編においても、その編集上の重点が置かれている。巻末の解説でも、「白眉」とされ、「機密日露戦史」および「明治軍事史」に本書の一部が使用され、日露戦争史研究上の重

要史料の一つであることが紹介されている。特に、樺太占領計画が海軍側の消極的

態度・反対により、なかなか進まず、そのなかであって、政略上、作戦の必要を唱えて長岡が奔走するくだりや（第二章樺太行難・第三章北韓軍前進難）、また、第四章の旅順攻撃難での、正面攻撃に固執する第三軍参謀長伊知地幸介少将と二〇三高地占領を第一義に主張する長岡との対立が述べられ、旅順要塞陥落の遅延と被害の原因が、

伊知地参謀長の作戦にあることを主張しているところなどは、軍事史上の貴重な証言とすることができるとして、大本営と満州軍総司令部間に、安奉線敷設や給養、第八師団派遣、外国観戦武官をめぐって対立があったことは（第五章営部の小迫り合）、日露戦争における統帥、そして、それ以降について考える上でも参考になる点が多いものである。しかし、一方で、「回顧録」は慎重な史料批判も必要である。日露戦争史の先行研究である大江志乃夫氏が指摘されているように、旅順要塞攻略にあたっての二八榴弾砲配備について、「自己の功績を誇るための誇張」大江氏前掲書、一〇二頁）が成されている部分もあり、一次資料に基

づいて、十分な史料批判が必要であろう。

次に、「書簡・書類編」の構成は、一九〇

四（明治三七）年六月以後の日露戦争期（参謀次長時）以降の書簡と長岡の予備役以後のライフワークとなった航空事業についての書類が収められている。だが、残念なことに「月曜会倒壊後明治二十三年」から「中佐時代」までの巻物（日露戦争前）の書類は、収められていない。書類類の重点は、日露戦争期となっている。書簡の内容については、日露戦争時、長岡が参謀次長という重職にあったゆえに、多岐にわたるとともに、重要な内容を持つものが多い。具体的に内容を分類すれば、①出征地の状況報告（満州軍についての井口省吾・兎玉源太郎書簡、旅順方面についての伊地知幸介書簡等、台湾守備軍・清国政府・大谷喜久蔵書簡に代表される韓国情勢等）、②諸外国の日露戦争に対する反応についての書簡、③参謀人事についての書簡（人事政策については、長岡の意見が重視されたものの、寺内陸相と多くの衝突があったとされる）、④作戦面（特に樺太占領作戦）についての書簡、⑤民間人からの献策、⑥日露戦後の政

治状況についての書簡、⑦航空事業関係の書簡（国民飛行会、帝国飛行協会等）に分類することができる。

紙幅の関係上、詳しく検討することはできないが、①については、多くのものが「機密日露戦史」に引用されている。これは、日露戦争における戦争指導の実態を見る上で、貴重なものである。日露戦争七五周年にあたって開かれたシンポジウムでも論議されたように、今後多角的な分析と実際の戦闘報告等の一次資料との照らし合わせの中で再評価が必要であろう（シンポジウム日露戦争―「軍事史学」第六三号、第六四号）。また、②については、日露戦争の情報戦としての側面については、従来高い評価が与えられているが（島貫重節著「戦略・日露戦争」上・下、原書房）、この長岡宛書簡では、その限界についても述べられており、その後の情報収集の在り方を考える上で参考になるであろう。③では、参謀人事において寺内陸相と長岡が対立したと言われるが、その背景を知りうる資料である。しかし、寺内からの書簡が少なく、短いのは、残念である。④もまた、「回顧録編」と

共に、陸海軍対立、日露戦争の戦争指導に

おける陸海軍の対立（統帥部の分裂）を知る有力な手掛かりであろう。⑥の田中義一書簡は、特に貴重であり、内容的に面白いものである。

今後、日露戦争史を再考する場合、軍事史面での綿密な研究の積み重ねが必要とされている。そうなれば当然、当時の戦争指導者である軍人の研究も進むことになるであろう。現在のところ、日露戦争期の軍人は昭和期の軍人との比較において、国際感覚、情報戦略の面で一般に高い評価を与えられているが、今後、同時代史的視点から、その志向と政治力について、再評価が進むことと思われる。その意味でも、この「書簡篇」の長岡宛書簡に代表される一次資料の重要性はより高まることとなるであろう。

一方、「書類編」も、大正後期の軍縮期の予算をめぐり、海軍の補助艦艇補充が一つの争点となっており、加藤定吉海軍大將との間で論争となったことを考えれば、政治史的にも利用することができるものである。

最後に、本書刊行に際して、可能な限り資料の復元に努力された長岡外史文書研究会の方々の御苦勞に対して、読者の一人として感謝の念にたえない。これからも、こ

のような形で福島安正の資料や防衛研究所所蔵の資料等が公開されることを望んでやまない。しかし、「回顧録編」で日清戦争期の回顧録が収録されず、また、「書簡・書類編」で明治中期の陸軍内部を知ることが出来る書簡類が収録されていないのが残念である。紙幅・編集上の制約からやむをえなかったか、とも思われるが、長岡外史という明治期を代表する一人の軍人を評価する上で、できうるならば、全ての資料を収録してもらいたかった。何らかの機会を以て、発表されることを期待するものである。

後半部分のスキーマの導入・普及、航空事業との関係については、筆者の能力不足から、詳しく紹介することができなかった。この点を含めて、「人間・長岡外史」（長岡外史顕彰会、昭和五一年）が、多くの写真などを用いて、よく長岡について伝えてくれる。本書とあわせて読まれることをおすすめする。

（こいけ・せいいち 外務省外交史料館）

（A5判、回顧録編五八四ページ・八八〇〇

円・一九八九・五刊、書簡・書類編四七四ページ・七二〇〇円・一九八九・二〇刊、吉川弘文

館）